

## 南丹市美山町音海

ヒアリング対象：江藤政行さん、公江さん夫婦

大阪より1ターン（在住19年）

政行さん 画家・デザイナー・大学講師

公江さん 調理師（地元の老人施設での調理場で勤務）



林陽子さん

美山に移住19年目。アロマセラピスト  
美山 陽だまりアロマ亭 野の花 主宰



江藤政行さんは、奥様の公江さんをご結婚して、3年間は大阪の中心地（天神橋筋八丁目）のマンションで新婚生活を送られていたそうです。公江さんは、調理師になられる前に大阪のデザイン事務所に勤めていたご経験があり、その頃から美山町はご存じだったので、時々遊びに来られていたということです。

江藤ご夫妻が美山町への移住をしようと決めたまっかけは、政行さんが当時、デザイン事務所にご勤務されていた所でアートの活動をされる日々の中で、「絵」を描くことに専念されたいという思いが強くなったことだそうです。そこで、江藤ご夫妻が自然豊かなところへ住まいを変えろということ。都会暮らしから田舎暮らしに変わることを決められたことは、ごく自然の流れだったということです。

その移住先が美山町であったのは、先に述べたように、公江さんがご結婚前から美山町をご存じで、ご結婚後も政行さんと一緒に一年を通して幾度となく遊びに来られている中で、美山の四季、町の様子を知るようになり、美山町に移り住むことはごく自然と決まったとのことで、他の田舎地域で新生活をすることは特別に検討しなかったそうです。

また、美山町には、公江さんの大学時代の時からのお知り合いの方がおられ、その方が美山町で2軒の家屋を所有されておられ、そのうちの1軒を購入し、もともと美山町の平屋地域に建てられていた場所から現在お住いの音海（杵）地域へ家を移築して暮らし始められたそうです。

愛娘のつぐみちゃんが誕生したのは、政行さんと公江さんの美山町に移り住んで3年後だということです。つぐみちゃんは、美山町内の保育園・小学校・中学校と通い、現在は、高校1年生に成長されました。高校は、自宅から毎日、バスで片道約50分ほどかけて通っていらっしゃいます。

つぐみちゃんは、とても天真爛漫な女の子です。そして、とても感性が豊かな少女です。つぐみちゃんには一つ、特技があります。その特技とは、野生の鹿の鳴き声を真似ることが出来て、家の周辺にやってきた鹿と会話が出来ることです。



江藤ご夫妻は、美山町住民としてはもちろん、つぐみちゃんの子育てを通して一人の保護者として学校や地域との関わりを深く持たれています。現在も様々なところで、地域を活性化するご活躍をされながら、充実した美山暮らしをなさっています。公江さんは、つぐみちゃんのお母さんとして、子供を通じたお母さん同士の繋がり（いわゆる、ママ友）が中心となるお付き合いが必然となっているということです。

ママ友の数も、地域の女性の数も絶対数が少ないので、出会い集まる機関・場所は違うけれど、お馴染みの顔ぶればかりだということです。「お馴染みの顔ぶれではあっても、出会う場所が違くとそれぞれの人の立場が変わるので、同じ人と出会っても話し方や話の内容が変わってくるのが楽しい」とおっしゃっていました。例えば、PTAの会合で出会うとき、職場で出会うとき、地域の自治会で出会うとき、地域の祭りや運動会で出会うときなど、シチュエーションは色々ある中で、美山の人との繋がりを大切に、楽しんでいらっしゃるご様子が伺えました。

政行さんは、つぐみちゃんの保護者・お父さんとして、公江さん同様に学校に出向く機会もこれまで多く、学校が取り組む子供への育成事業に積極的に協力してこられました。政行さんは、お若い頃アイスホッケーをなさっていたとのことで、つぐみちゃんが大野小学校にまだ在籍の時、大野小学校の冬のスポーツ体験事業の取り組みの中で、子供たちの校外授業において、スケートの滑り方を子供たちに指導する講師として、ご活躍されていました。

さらに政行さんは、画家としての才能を兼ね備えたアーティスト「えとうまさゆき」として、その才能も惜しみなく、地域にご提供していただいています。美山町内に、土木会社が所有する土石及び解体した建物のコンクリートや鉄くずなどを捨てるゴミ捨て場があります。そのゴミ捨て場は、美山町内を横断する府道沿いにあり（大野地区）、その荒れ果てた景観を見せないための灰色のコンクリートの壁が建てられています。そこに、えとうまさゆきさんの指導のもと大野小学校の児童たちが自由にのびのびと、夢ある、絵を描きました。

(1998年実施)



その壁の前を通る府道を超えて、大野の萱野地区に通じる萱野橋がかっていますが、橋を渡る手前から見えてくる子供たちが描いた壁画は、今でも輝いています。当時に描いた子供たちにとっては、心残る記念となり、地元、萱野の地区の人にとっても、萱野橋から渡る手前から見えてくる壁画は目に焼きつく景色となって、今では地元大野では名所の一つとなりました。

大野小学校では、毎年秋に学習発表会「にじの子カーニバル」が開催されます。午前中は大野小学校の全校児童が、学年ごと順番に歌、お芝居・音楽の演奏などをし、全児童そろっての発表も繰り広げられます。そして、午後からはPTA（保護者）の方々もこのために練習を重ねてきた合唱や音楽の演奏の発表をしたり、外部からプロの音楽アーティストの方々を招いて公演をさせていただいたりします。14年前の「にじの子カーニバル」の時に、保護者の中から「お芝居をしよう！」、「大人たちも芝居をして子供たちを喜ばせたい」との声があり、当時の校長先生や他の先生数人にもご出演頂いて、「忠臣蔵」を題材にしたお芝居をしました。その時の脚本・演出・監督を務められたのは、えとうまさゆきさんでした。



この14年前にたまたま、保護者の方、数人で行った「忠臣蔵」を題材にした1作のお芝居がきっかけで劇団「mWo」が誕生しました。そしてその後、毎年、面白いストーリーの脚本をえとうまさゆきさんが書かれています。大野小学校の児童たちが「mWo」のお芝居を楽しみにし、惹きつけられていく様子が実感できたこと、メンバーの大人たちが大いに楽しんで取り組んでいたことが、継続する理由（励み）にもなったのです。

子供たちは、自分の親がお芝居をしている姿、或いは、自分の友達のお父さん（あの、おっちゃんが）がお芝居している姿、普段は怖い先生がお芝居をしている姿を見て、大いに面白がり、楽しんだようです。

えとうまさゆきさんが書かれる毎年のオリジナルな脚本には、子供たちに伝えたいメッセージが込められています。また、心地よい音楽の挿入はお芝居を盛り上げ、シンプルな演出は子供達の想像性を高める効果があり、それもえとうまさゆきさんの狙いの一つであるようです。子供達の中から「mWo」に入ってお芝居をしたいと、憧れの気持ちを頂いてもらえるようになったのも、「mWo」のメンバーにとっては活動の励みとなっています。

ちなみに、つぐみちゃんは小学校に入る前から「mWo」のお芝居に出演してきた女優さんです。小学校に在籍の6年間は、「mWo」の活動ができなかったのが早く、小学校を卒業したくて仕方がなかったのです。そして、つぐみちゃんは中学生になって、即「mWo」に戻ってきました。高校生になった今でも毎年、秋が楽しみでならないのです。

2012年が始まった年度の初め、大野小学校の校長先生（小畑恵子校長先生）から、「本年度（2012年度）の大野小学校の取り組み授業として、子供たちの表現力、人前での発表力、感受性を高める教育の一つに演劇指導を入れたい」ということで、「mWo」主宰のえとうまさゆきさんへ、大野小学校の児童に演劇指導の依頼がなされました。

今年の大野小学校の児童たちは、えとうまさゆきさんの指導をうけて、とても楽しかったと感想文を書かれていたのを見せていただきました。また、来年度も大野小学校の児童に演劇指導をしてほしいとの要望を、早くも校長先生から言われていらっしゃるということです。大野小学校が続く限り、「mWo」の活動も続けたく、次回（来年）作品もえとうまさゆきさんの頭の中にすでに、構想が始まっているみたいです。



えとうまさゆきさんは、クリエイティブなお仕事をなさるアーティストとして、田舎暮らしは、創作意識を高めるのに適した環境であることは間違いないところだと言われました。また、生き物として（人間として）、自然と対比しなくてはならない、とも言われていました。

田舎暮らしは、「絵」を描くために、劇をするために、音楽を生み出すためのトレーニングの場所だと。全てが便利がよかったら、アイデアが狡猾すると、言われました。（まさに、今、講師を務めている大学の学生たち、若者がそうだそうです。）

政行さんと公江さんに、「これから、田舎（美山）暮らしを始めようとしていてる方にメッセージを贈るとしたら？」と質問をしましたところ、「田舎（美山）に移住することだけに期待して暮らすのではなく、新しい自分を見つけて、何かをしないと（行動を自ら起こさないと）、田舎暮らしを楽しめないし、田舎暮らしは出来ないと思う」と、おっしゃられました。